

アンドレ・ジッドと「ホモペアレント性」

森 井 良

1. 「ホモペアレント」の先駆者

周知のとおり、フランスでは2012年から翌年にかけて同性婚に対する国民的意識が高まった。そこでは同性愛者が親として家庭を構成するのを認めるか否かという、いわゆる「ホモペアレント」の問題がセットになっており、とりわけ彼らの養子縁組による社会的親権の是非が議題に上がっていた。フランスではホモペアレントをある意味で概念化した「ホモペアレント性 homoparentalité」という造語が流布しているが、1990年代から先駆けて同問題を取り上げていた社会学者のマルティヌ・グロスによれば、この語は「少なくとも一人の親が同性愛者の自覚をもつ家庭の状況」を指し、多岐にわたる該当の状況——連れ子、養子縁組、生殖補助医療（PMA）や代理出産（GPA）、共同親権など——を包含しているという⁽¹⁾。

ところで、以上の議論のさなかに我々の関心を引いたのは、主に社会学や一部のジャーナリズムにおいて、アンドレ・ジッドをこの新たな親権ないし家庭状況の先駆者として捉える向きが見られた点である。論争の渦中に『フランスにおけるホモペアレント性』（2012年）を上梓した社会学者のエリック・ガルニエは、ジッドがエリザベート・ヴァン・リセルベルグとのあいだにもうけたカトリーヌを「先駆的な娘」——「いずれもホモセクシュアルかバイセクシュアルであったであろう両親によって望まれた」子供——と見なし、当のカトリーヌへのインタビューと彼女の誕生の経緯を紹介しながら、次のような間接的な問いを投げかけている⁽²⁾。「我々の目前に差し出されているのは、結局のところ、美しくも複雑な家庭の光景——今風に言うなら、拡大され、再構成された家庭——である。こちらのほうが同時代の多くの状況よりも背德的とされてしまうのはいったい何故なのだろう？」⁽³⁾

事実、ジッドは妻マドレーヌとの婚姻関係——「マリアージュ・フラン白い結婚」つまりセックスレスの夫婦生活だったと言われる——を維持しつつ、友人の娘エリザベート・ヴァン・リセルベルグとのあいだに一女をもうけている。友人とは、ベルギー新印象派の画家テオ・ヴァン・リセルベルグ（オランダ語読みではテオ・ファン・レイセルベルヘ）フチット・グームのことであり、「小さな貴婦人」と呼ばれたその妻マリアは、芸術や性に対して自由な価値観をもち、腹心の友として長らくジッドに寄り添いつづけた。彼らを祖父母とする婚外子の誕生（1923年）は、すでにジッドが自らのセクシュアリ

ティを確定していた時期の出来事であり、また彼は子供を中心とした「家族」の構成のなかに、自らの愛人マルク・アレグレをはじめとするクィアな友人たちを引き入れ——ロジェ・マルタン・デュ・ガール、ピエール・エルバル、アリーヌ・メイリッシュ、そしてエリザベートの母でありながらアリーヌと情熱的な関係を築いていたマリア——、彼らとともに集団的養育を行っていたふしがある。

他方でジッドは早くから血縁に代わる人間の絆を模索し、作品のなかで養子を基調にした当時としては斬新なアソシエーションの形を提示してもいた。これらの事実からジッドにおけるホモペアレント性の主題を読みとることは可能と思われるが、とはいえ、作家本人が一連の事象をどう捉えていたかは慎重に検討しなければならない。本稿ではこの主題の妥当性と発展性を見定めるために、書簡や証言、テキストの読解を適宜組み合わせつつ、ジッドが目指した新たな家庭像に迫ってみたい。

2. 「家庭」を憎むジッド——『地の糧』

ジッドを「新たな家庭」のパイオニアと捉える論者たちは、上述した伝記的事実だけでなく、作家自身の言葉も引用している。「家庭よ、私はおまえを憎む！ Famille, je vous hais !」という、よく知られた台詞もその一つである。実際、前述のマルティヌ・グロスは、十九世紀末から二十世紀前半の同性愛者にとって家庭が「抑圧の場」であったことの証明としてこの言葉を紹介し⁽⁴⁾、『秘められた物語——アンドレ・ジッドとマルク・アレグレ』（2006年）——エリック・ガルニエが下敷きにしている著作——の著者ピエール・ビヤールもまた、同じ言葉を引き合いに出しながら、「大文字の家庭」批判にもとづく「ジッド的^{ジッド}な人^人たち」の連帯を示し、彼らが「選びとった家庭」を「真の家庭」に仕立てていったと評価する⁽⁵⁾。

なかば論拠のように援用されているこの銘句は、『地の糧』（1897年）のメナルクという登場人物が発したものであり、彼が自らの半生を語るなかで一つの挿話に挟み込んだ眩きにほかならない。十八歳で家を出、「家、家庭、人間が休息を見出そうとする場所をことごとく憎んでいた」メナルクは、田舎への旅の途中で次のような光景に出くわす。

私は夕方、見知らぬ村々で、日中散り散りになっていた家庭がふたたび形づくられてゆくさまを眺めていた。父親は仕事に疲れ果てて帰ってきた。子供たちは学校から戻ってきた。家の扉は、少しのあいだ、光と暖かさと笑いで迎え入れようと半ば開かれていたが、夜になるとふたたび閉ざされた。放浪するものはすべて、もはやそこに帰ってゆくことはできなかった〔…〕——家庭よ、私はおまえを憎む！ 閉鎖的な家、ふたたび閉ざされた扉、幸福の妬み深い所有よ——時々、夜にまぎれて、私は窓ガラスのほうに身をかがめたまま、一家の日常を長いあいだ見つめていた。父親はランプの傍にいた。母親は縫い物をしていた。一人の

男の子が、父親の近くで、勉強していた——そして私の心は、この子を旅の道連れにしたいという欲望で膨れあがった⁽⁶⁾。

「家庭よ、私はおまえを憎む！ 閉鎖的な家、ふたたび閉ざされた扉、幸福の妬み深い所有よ」という眩きじたい、ジッド的主体が称揚する脱所有の倫理とノマディズムを如実に表すものなのだが、さらに注目すべきは、この眩きを一人の放浪者に言わしめた構図と状況であろう。父・母・子という三者で構成された家族——社会の基礎的単位となる核家族の典型——、その水入らずな関係性のある種の排他的ムード、そこから子供を脱出させて再教育を施したいと願う一人の部外者……。事実、この部外者は件の子供を家から連れ出し、外の世界に対する「目を開いてや」りながら、親からも師（メナルク自身）からも離れた一個人として生きるようイニシエーションを施すにいたるのだが、こうした振る舞いのうちには、ジッドが理想としたギリシャに範をとる少年愛の教育的絆だけでなく、子供の引き取りという意味で養子縁組のテーマが少なからず現れていると言えるだろう。

またテキストのなかに明示されているわけではないが、メナルク——あるいはこの人物の造成過程——に同性愛者としての属性が付与されていることも考え合わせれば、ここの場面はなおいっそう示唆的となる。実際、『地の糧』はジッドがアフリカで同性愛を経験した時期に書かれた作品であり、『背徳者』（1902年）をはじめとする他の世紀末作品と同様、ピューリタンから享樂的なゲイに変身しつつあった作家自身の生活や感慨が多分に投影されている⁽⁷⁾。またメナルクというジッド作品に馴染みの主体の造形には——『地の糧』にとどまらず『鎖を解かれかけたプロメテ』（1899年）や『背徳者』にも再登場する——、同じ時期にジッドが友人として交際したオスカー・ワイルドが影を落としており、とりわけ『背徳者』のメナルクは1895年に男色の罪で投獄されたこの作家の人物像をなぞるところが多い⁽⁸⁾。『地の糧』にかんしては直接的なアナロジーは少ないものの、この作品の同性愛的匂いをいちやく嗅ぎつけてジッドに「一人称で語ってはいけない」と忠告を与えたのは他ならぬワイルド当人であった⁽⁹⁾。

このようにメナルクには放浪する同性愛者——ジッド自身とワイルド——という属性が多かれ少なかれ託されているわけだが、だとすれば事態はより明確になるだろう。つまり三位一体の家庭に対して憎しみの声を上げているのは、社会的秩序だけでなく、性的秩序——異性愛——からも駆逐された二重の孤立者にほかならず、そうした孤立者が既成のアソシエーションに対して脱所有の倫理を持ち込みながら逃走線を引こうとしているところに、件の場面のより深刻な政治性が現れているのである。『地の糧』における閉鎖的・排他的・占有的家庭への批判には、以上のようなテキスト内外の文脈が含まれており、それらはジッドとホモペアレント性との繋がりを新たに補強するものとなるだろう。むろん「憎む」という叫びのうちに、家庭や同性愛をめぐる幼年期から壮年期にかけての作家自身の感慨——ピューリタンの抑圧的な家庭と「他の人たちとは

違う」自らの性向に苦しみ⁽¹⁰⁾、生まれた地に根を下ろせという土着的ナショナリズムに反対し⁽¹¹⁾、ワイルドの投獄を機に同性愛擁護への使命を固くしてゆく⁽¹²⁾——が込められていることも忘れてはならない。

3. 「新たなヒューマニティ」の意味

次に注目したいのは、これもまた「ホモペアレント性」の文脈で引かれることの多かった「新たなヒューマニティ」という言葉である。たとえば、ある評論家はエリック・ガルニエの前掲書を評する記事のなかでこう結論づけている。「より文明的で、寛容的で、利他的な社会関係の新しい形の創始者としてジッドを捉えることは可能だろうか？ もちろん可能だ。そもそも、ジッド自身、『小さな貴婦人』に対してある日こう言明したのだ。『ああ！ 親愛なるマリア、私たちはまさに新たなヒューマニティを可能にしようとしているところなのです』。彼は未来を準備することを意識していたのである」⁽¹³⁾。

引用されているジッドの言葉は、彼自身が子供の誕生を計画する際に漏らしたものののだが、まず言葉が言われた背景をあらためて説明する必要があるだろう。前述したように、ベルギーの画家の娘として生まれたエリザベートは、母親の教育やイギリス留学の影響から、当時としてはかなり自由なマインドをもつ女性であった。とくにイギリスから持ち帰ったのは、揺籃期のフェミニズムの思想と、彼女が一度ならず交際したブルームズベリー・グループ——リットン・ストレイチー、ヴァージニア・ウルフ、ジョン・メイナード・ケインズ、ルパート・ブルックらを中心とした反道徳的な知識人の集団——の性的自由の気風である（とりわけ、彼女は第一次大戦中に命を落とした美男の詩人ブルックと東の間ながら愛情関係を結んでいた）。むしろ後者の気風の内面化には、性的アウトローとしてのジッドと彼の友人である作家たちからの薫陶もあざかっているだろう。エリザベート自身、ヘテロセクシュアルではありながら、かなりの程度「レズビアン的メンタリティ」を備えていたとされている⁽¹⁴⁾。

こうした当時としては新種の女性が結婚という制度に関心を示さなかったのは首肯できるところだが、反面、彼女は子供を産むことにかんしては積極的であった。その意思を聞いたジッドは、彼女のパートナー、来るべき子供の父親探しに乗り出し、候補者として自らの愛人であるマルク・アレグレに白羽の矢を立てたのだ。この成人してまもない青年を同い年のエリベートに引き合わせ、彼らが愛情関係——マルクはバイセクシュアルだった——で結ばれることを期待したのである。1920年4月12日にジッドはエリザベートの母親にこう告げている。

彼〔マルク〕は私がまだなされたことのない経験を実現するのを助けてくれるにちがいない。親愛なるマリア、私たちは冒険者なのです。私たちは新しいことをしようとしているのです。すべてはどのような結末を迎えるのでしょうか？⁽¹⁵⁾

計画の主導者がジッドであることがわかる発言だが、この四日後に、次のようにまで言う。

ああ！ 親愛なるマリア、私たちはまさに新たなヒューマニティを可能にしようとしているところなのです。この子はきっと美しいにちがいない⁽¹⁶⁾。

すでに喚起したとおり、この箇所はホモペアレント性のスローガンとして引用されることが多い。しかし、社会的変革への意志や先駆者としての自負が垣間見えるとしても、「新たなヒューマニティ」や「まだなされたことのない経験」が具体的にどういった状況を指しているかは曖昧なままだ。フランク・レストランガンが示唆しているように、ジッドとマリアが問題としていたのは、同性愛者（たち）の家庭づくりというよりもむしろ、当時は稀だった婚外子の妊娠、あるいはそこで期待される女性の新たな生き方であった向きが強く、この点は確認しておくべきだろう⁽¹⁷⁾。少なくともこの時点でジッドが望まれている子供の生物学的父になることを考えていたかは定かでなく、実際、彼は同じ日に「たしかに私は自分が子供をもつ運命になかったと信じている。私の方針にないことだ」⁽¹⁸⁾とマリアに告げている。おそらく「新たなヒューマニティ」とは、一人の若い女性が結婚という制度から離れて子供をつくり、その出産と養育をジェンダーやセクシュアリティの規範から自由な人たちが助けることで、伝統的な家庭とは異質なアソシエーションを作り出すことを指していたのだろう。

しかし、こうした「新たなヒューマニティ」は内容の変更を迫られることになる。1922年4月30日、ジッドは以下のようなメモをエリザベート本人に渡している。

私はただ一人の女性しか真に愛すことがないだろうし [マリアによる注記。「彼はマドレーヌことを思ってこう言った」、若い男にしか真の欲望をもてない。しかし君に子供がないのを見るのは忍び難く、また、私自身に子供がないのも耐え難い⁽¹⁹⁾。

「愛」と「欲望」とを峻別し、前者を妻のマドレーヌに、後者を若い男性に向けるというのはジッドの変わらぬスタンスなのだが（じかも「愛」のほうが尊いとする⁽²⁰⁾）、そうした告白とともに自身の「子供」についての言及がされている点に注目しなければならない。つまりジッドは自らのセクシュアリティを引き受けたうえで子供——ここでは実子——をもつことへの願望を口にしているのであり、この同時性から読みとれるのは、自分自身に忠実なまま二つの欲望を両立させる可能性を彼が意識していたということである。同性愛と生殖（あるいは親権）という伝統的に両立不可能なカテゴリーを、法的・宗教的正当性に適う結婚という制度の外で融合させること

——こうした可能性への意識は、本論の冒頭で紹介したホモペアレントの議論と直結するわけだが、いずれにしても、結果的にジッドが子供の社会的父ではなく生物学的父を引き受けたことで、「新たなヒューマニティ」の意味合いとインパクトが事後的に深まったことは確かなようだ。

4. 養子縁組とアソシエーション

伝記的な事実からいえば、ジッドは同性愛者が生物学的親になるというホモペアレント性の最もラディカルな形態を選んだことになるが、そうした思いもよらぬ結果にいたるまでは、生物的絆よりも社会的絆を重視していたところが大きい。そのことはマルクとエリザベートに子供をつくらせて自らは「代父」になるという計画、さかのぼれば、マルクに対して恋人としてだけでなく親代わりの「叔父」としても振る舞うという姿勢に表れていた。集团的養育であれ一種の擬似家庭であれ、それらは伝統的な家庭への代替として捉えられる試みであり、少なくともそこには同性愛者が家庭を築くための別のオプションが示唆されている。

実際、ジッドが残したテキストを通読してゆくと、彼が養子縁組や同性愛を基調にしたアソシエーションに対して肯定的なヴィジョンを持っていたことがわかる。彼はアソシエーションという概念をより自由で懐の深いものにしたいと望んでいたふしがあり、時に「肉親の情」を「神話でしかない」イデオロギーとして非難しつつ、伝統的なアソシエーションとしての家庭を批判する際には、生家（＝生まれた家庭）を養家（＝選択した家庭）に代えることも主張している⁽²¹⁾。こういった言辭はメナルクに「家庭を憎む」と叫ばせる前にも現れており、たとえば1897年の『キリスト教的モラル』では、福音書のなかに家庭や結婚の否定を読みとりながら（「私が見るところ、キリストの言葉のうちに結婚や家庭を裏づける言葉はひとつもなく、それらを認可する言葉さえない」）、その例証の一つとして以下のような挿話を取り上げていた。

キリストはあいかわらず彼を特別に愛しつづけている母親に向かってこう言った。「女よ！ あんたと私のあいだに何の共通項があるというのか？」 そしてずっと後になって、十字架の上から […] ヨハネを指差しながらマリアに「女よ、あれがあんたの息子だ」と言った。そしてヨハネにはマリアを指差しながら「あれがおまえの母親だ」と。人々はここに養子縁組の美しさを見たことだろう。なぜなら、養子縁組もまた家庭を破壊するものだからだ。二つの悲しみが涙ながらに結びついていることも私は認めるのだが […]、悲しみは養子縁組を絶えず更新してゆくことで消滅し、不可能なものとなる⁽²²⁾。

ジッドの見立てによれば、「絶えず隣人に注がれうる移り気な愛情」が「限定された愛情」に取って代わるべきであることを十字架上のキリストが示しているという。それは彼自身が肉親と弟子のあいだの養子縁組を取りもっていることからわかるわけだが、こうした絆の更新によって、

実子／師を失うそれぞれの悲しみが同時に癒されるというのである（「更新」というのは、「弟子をとることは、必然的に彼をその家庭から抜き取ることである」かぎりにおいて、キリストと弟子の関係が最初の養子縁組と見なされているからだ）。ジッドはさらに解釈をすすめて、キリストが捨てよと諭すもののなかに「家庭」が入っていないはずはないと言い切り、同じくキリストの言葉から「家庭が否定されるやいなや、愛の対象は無限に拡大してゆく」と結論づける⁽²³⁾。

いずれにしても、そのキャリアの早い時期に作家が「家庭を破壊するもの」としての「養子縁組」を奨励していることは特筆すべきことだが、こうしたヴィジョンは同性愛やアソシエーションの概念と結びつきながら発展してゆくことになるだろう。たとえば、男色擁護の書として著名な『コリドン』（1924年に公刊）の準備段階において、ジッドは「家庭」の問題を「自分たちの生まれた家庭から逃れて養子になった子供たちの物語」に流し込もうと企図していた⁽²⁴⁾。結局この計画を実現したのは『コリドン』ではなく、『贖金づくり』であったわけだが、ジッド唯一の本格的「小説」となったこの作品では、「選択した家庭」を表象するアソシエーションが多く現れている。とりわけここで指摘したいのは、草稿のなかに現れるイルダという女性の——フェミニスト的——登場人物が、フランスの家庭とポリネシアの家庭の相違について次のように語るところである。

あなたがたにそんなことは理解できないでしょうね。ここ〔フランス〕では家庭があまりにも閉じられていて、家庭的な感情もきわめて偏狭で、排他的ですから……。向こう〔ポリネシア〕の家庭はといえば、単なる集団、互いに仲良く愛し合っている人たちからなる自由なアソシエーションなのです——肉親の情もほとんど気かけません。正確に言えば、人々が互いの子供を養子として迎え入れるのです⁽²⁵⁾。

メナルクの叫びが残響している箇所だが、ここでは「肉親の情」にもとづく家庭を超えたところに——さらに言えば、そうした血縁重視のフランス的価値観に対する批判の延長線上に——、養子縁組を基盤にしたより広く「自由な」かたちの家庭が提示されている。こうした「アソシエーション」は既存の家庭から逃げ出した／駆逐された者たちの受け皿になりうるものであり、そのことは作者が考えるアソシエーションの「良識」を体現してもいるだろう。『贖金づくり』から二年後の『日記』には、次のようなアソシエーションをめぐる定理が差し出されていた。

夫婦関係であれ友情関係であれ、何らかのアソシエーションのなかで共同生活をつづけていると、カップルあるいは番^{つが}いの良識がある意味で共有のものとなる。配偶者の一方が極端に走ると、バランスをとるように、他方は逆の極端に走るようなことになる。したがって妻が極端に信心深くなると、夫は無神論に突き進むことになるだろう。元来几帳面でしかなかっ

た一方が些細なことにこせこせしだすと、他方はますますだらしくなってくる。一方が浪費家になればなるほど、他方は吝嗇家になる。後者があらゆるものに鍵をかけておくのは、前者が反対にあらゆるものを放ったらかしにしておくからだ。同じく齧歯類の顎においても、上顎の歯が欠けてくるとそれに対応する下顎の歯が長くなるのを我々は知っている⁽²⁶⁾。

ジッドがいう「友情関係」に同性愛ないし少年愛の絆が含まれていることは言うまでもない。そのうえで注目すべきは、彼が「アソシエーション」を互いに対立する人物の結合と見なし、それぞれの相互関係を自然のものとして肯定している点である。「良識」がジッドにとって「最も稀な資質」だとすれば——「良識はこの世で最もよく共有されたもの」とするデカルト以来のフランス的価値観に反して——、この得難い資質こそ本質的に異なる個々人の結合を要請するものと言える⁽²⁷⁾。というのも、ジッドは「良識」を「決して何ものも、自分自身さえも、恣意的にあるいは自惚れによって孤立させない」ことと定義しているからだ⁽²⁸⁾。ジッドによれば、アソシエーションは孤立者どうしの連帯にほかならず、この連帯は彼らの手によって組成され、調和的なかたちで発展していかなければならない。ジッド的アソシエーションの意義は、個人が自らの特異性を保持しながら他者と協同してゆくことにあり、このことは先に挙げてきた養子縁組的・ホモペアレント的ヴィジョンの素地となる原則であるだけでなく、個人主義と集団原理の折衷を目指したこの作家の生涯にわたる基本的スタンスになっているのである。

5. 親権の委譲——『田園交響楽』と『贖金づくり』

伝統的家庭への批判と養子縁組の称揚は、多くのジッド作品において通奏低音のように聴取できるわけだが、1919年に発表された『田園交響楽』もまたその例外ではない。主人公である牧師の一人称によって語られるこの「物語」は、次のように要約されるだろう——ジェルトリュードという盲目の孤児を引き取った牧師が、外界に対する「目を開く」ための教育を彼女に施してゆくが、やがて聖なる保護者としての立場を踏み越えて恋愛感情を抱くまでになり、妻や実の息子との軋轢やジェルトリュードの開眼手術から生じた悲劇によって、最後は破滅するにいたる。文字どおり「盲人もし盲人を手引きせば、二人とも穴に落ちん」という『福音書』（『マタイ伝』十五章十四節）の命題をドラマ化した作品であり、そこには血縁や結婚を超越した絆の創成が主題化されている。実際、牧師はジェルトリュードを自身の家庭のなかに受け入れ、肉親に非難されるほどこの養子に愛情を注ぐわけだが、二人のあいだでは次のような会話が交わされる。

「盲人の子供は、必ず盲人に生まれつくものではないですか？」〔…〕

「いや、違うよ、ジェルトリュード」と私は言った。「ごく特殊なケースでないかぎりそうはならない。子供がそうな理由も、まったくない」

彼女はとても安心したように見えた。なぜそんなことを訊くのかと、今度は私のほうから尋ねてみたかった。しかしその勇気はなく、ごちなく言葉をつづけた。

「しかしね、ジェルトリユード、子供をもつには、結婚していなければならないんだよ」

「そんなこと仰らないで、牧師さま。それが本当ではないことぐらい、私、知っています」

「私は君に言っても恥ずかしくないことを言ったまでだ」と私は言い返した。「でも実際、人間や神の掟が禁じていることを、自然の掟は許している」

「神の掟は愛の掟そのものだと、あなたはよく話してくださいましたわね」

「ここでいう愛はもう、隣人愛とも呼ばれるあの愛のことではないんだよ」

「あなたが私を愛しているのは、隣人愛からなの？」

「そうじゃないことは、君もよく知っているじゃないか。愛しいジェルトリユード」

「それはそうだけど、じゃあ私たちの愛は神の掟から逸脱していると思っていらっしゃるの？」

「どういうことだ？」

「まあ、よくご存じのくせに。私の口から言うべきことではないでしょう」⁽²⁹⁾

一見無邪気でありながら実は苦しげなやりとりをとおして、さまざまなカテゴリーが問題になっている。遺伝の否定、結婚に対する疑義、神の掟と自然の掟の齟齬、愛の掟の定義——それらを背景に「隣人愛 *charité*」を超えた愛の可能性と、盲人が家庭をつくる可能性が言われているわけだが、こうしたヴィジョンは、父性と純粋な愛の混交した、主人公と被保護者との関係だけでなく、作者が婚外子を誕生させるために練った計画、つまり『田園交響楽』から三年後に実現した計画を正当化するものでもあるだろう。

牧師とジェルトリユードの結びつきは、前者と実の息子のそれと平行なわけだが、この関係は1917年からジッドとマルク・アレグレとのあいだに結ばれた同性愛の絆を下敷きにしたものだ⁽³⁰⁾。ギリシャ的少年愛を範にとった年長者と年少者の絆は、養子縁組とは言わずとも、肉親の縁から精神的な親縁^{パランテ}への移行を含意している。というのも、マルクの実母であるシュザンヌ・アレグレは、ジッド宛の書簡において次のように言明しているからである。

あなたのような男のひとが、筆やことばによって、今の若者にしてあげられることを思うと、私は身のうちで燃えさかっている熱い炎であなたを満たしたくなるのです。あなたがその炎を私の息子たちに伝えくださるようにと。私にはそれができなかつたのですから⁽³¹⁾。

ここには実母から代父への一種の親権の移譲がほのめかされている。事実、ジッドはなかば「叔父」としてアレグレ家の末っ子であるマルクの教育を両親から全面的に任されていた（少なくとも

も、『コリドン』の内容を牧師であった実父が聞き及ぶまでは⁽³²⁾。つまりジッドはこうしたマルクとの関係を『田園交響楽』において実の親子として捉え直していたわけであり、ここにもまた、牧師とジェルトリュードのカップルと同じく、血縁と同等の親子関係——社会的父と養子——の可能性が反映されている。

ところで、シュザンヌがジッドに示したような親権の委譲と、象徴的な意味での養子縁組の可能性は、『贖金づくり』にも表れている。この小説の主要人物の一人にオリヴィエという少年がいるが、彼の母親は息子を自身の兄で小説家のエドゥワールに託していたからだ。

オリヴィエがあなたの家にいることを知って、それだけで私は安心しているの。〔…〕あなた以上にあの子の世話を私はしてやれないでしょう。だって、あなたが私と同じくらいあの子を愛しているということを、私はよくわかっているから〔…〕どんなによく護られているように見えても、男の子の純潔がいかに一時的なものであるかが、よくわかったわ。それに、最も純潔な青年が後になって最良の夫になるとも思えないしね。〔…〕結局のところ、父親の例を見てきたせいで、私は息子たちに違う美德をもってほしいと望むようになったわ。とはいっても、息子たちが放蕩にふけったり、下劣な関係をもったりしないか、心配はしているの。オリヴィエはすぐに自制心を失くしてしまう子でね。どうかあなたがあの子を引き留めてやってください。あなたなら、あの子のためになれると思うの。あなたにしか見つけないんだから……⁽³³⁾。

先に見た親権の移譲がジッド自身の考える少年愛の意義と結びつけられている。彼女はエドゥワールが少年に愛情を抱いていることも承知で（エドゥワールがジッド的少年愛を投影された分身の人物であることは言うまでもない）、二人の絆を実母の立場から承認するのである。ジッドは少年愛を年少者に愛を教え、男性・市民としてのイニシエーションを授ける最良の機会と見なしたわけだが、こうした性愛を超えた教育的絆は、家庭側——血縁を基にした伝統的家庭の側——からの同意によって、象徴的な養子縁組あるいは精神的なレベルでのホモペアレント的状况を含意するようになる。

6. 結論に代えて

以上のように、ジッドにおける「ホモペアレント性」の問題を考えるなかで、この作家の家庭観、具体的には同性愛と家庭との関わりを様々な例から提示してみた。すでに見てきたように、この関わりは「家庭」という既成のアソシエーションへの異議申し立てから発し、その代替としての「第二の家庭」の醸成を含むものであったわけだが、別の観点からみれば、そこには同性愛に対するジッドの捉え方、あるいはジッドが構想する同性愛者と社会の関係の縮図が表れてもい

る。

ジッドは『背徳者』においてすでに同性愛者の社会的統合の道筋を提示していたが、1920年代に入ると、その問題をギリシャの友愛に範をとった「少年愛」^{ペデラスティアー}復権の文脈から論じ（『コリドン』）、さらに自らの性的嗜好の問題に引きつけたうえで（『一粒の麦もし死なずば』）、問題解決のヴィジョンを小説のなかで提示するまでに至る（『贗金づくり』）。ジッドが示す社会的統合のヴィジョンには、当事者を既存のアソシエーション——国家、軍隊、家庭、キリスト教的共同体など——へ統合する方式と、同種の者たちで構成される民間のアソシエーションに帰属させる方式が含意されており、後者は前者を達成するための媒介的な役割を担っている。総じて言えば、ジッドの立場は「性的異常者」を「非連帯者」として捉える体制側の傾向に異を唱えるものでありながら、自らをアウトサイダーとして特権化する当事者側の傾向（ブルースト、コクトー、ジュネなど）とも一線を画すものであり、当時の同性愛をめぐる文化的・政治的文脈において独自の路線として位置づけられる⁽³⁴⁾。

我々は別のところで、同時代の連帯思想への接近と批判の延長上にジッドが独自の連帯の形を想定していたことを論じたが⁽³⁵⁾、とくに『背徳者』で喚起されていた〈デラシネのアソシエーション〉には、多分に同性愛者の連帯——「性の領域での連帯」⁽³⁶⁾——が含意されている。ジッドは『コリドン』において「男色」を擁護し、『贗金づくり』では年長者と少年の教育的関係あるいは少年同士の友愛をドラマ化した⁽³⁶⁾が、このような同性愛にからむ連帯の前面化は、伝統的な同性の絆を再評価するというだけでなく、それまで市民権のなかった性的マイノリティの社会的統合を喚起するという同時代的な意味合いでも理解されるべきであろう。ジッド的同性愛を「連帯」として捉え直す試みは、ジッドが後続の世代に与えた影響のみならず、現代フランスにおける彼のアクチュアリティを測ることを可能にするにちがいない。

* 本研究は2016年度早稲田大学特定課題研究費の助成を受けている。

注

- (1) Martine Grosse, *L'Homoparentalité*, La Cavalier Bleu, coll. « Idées reçues », 2009, p. 5.
- (2) Éric Garnier, *Histoire de l'homoparentalité en France, La Bataille des nouvelles familles*, Éditions Thierry Marchaisse, 2012, p. 135-137
- (3) ガルニエはこの箇所を『ル・モンド *Le Monde*』の記事から引用している (*ibid.*, p. 137)。彼が参照したピエール・ビヤールの『秘められた物語——アンドレ・ジッドとマルク・アレグレ』(Pierre Billard, *André Gide & Marc Allégret, le roman secret*, Plon, 2006) の書評の一節である。Patrick Kéchichian, « Singulier libertinage : l'étonnante liaison d'André Gide et Marc Allégret », *Le Monde* [en ligne], le 18 mai 2006 : <https://www.lemonde.fr/livres/article/2006/05/18/singulier-libertinage_773146_3260.htm> [consulté le 23 août 2018].
- (4) Grosse, *L'Homoparentalité*, p. 23.
- (5) Billard, *André Gide & Marc Allégret*, p. 121.

- (6) *Les Nourritures terrestres*, in *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. 1, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 382. 「翌日、私はあの子に再会した。学校から出てくるところだったらしい。その次の日、私は彼に話しかけた。四日後、彼はすべてを捨てて私についてきた。平原の輝きを前にして、私は彼の目を開いてやった。平原が自分のために開かれていることを彼は理解した。つまり私は手ほどきをしたのだ、彼の魂がもっと彷徨って、最後には快活になれるように——そして私からも離れ、自身の孤独を知ることができるように」 (*idem*)。以後、本書を *RRI* と略記する。
- (7) プレイヤード版の注釈を参照のこと。Pierre Masson, « Notice » des *Nourritures terrestres*, *ibid.*, pp. 1317-1318.
- (8) 『背徳者』において、メナルクは「恥ずべき素行の男 *homme de mœurs décriées*」としてつねに世間から糾弾されている (*L'Immoraliste*, *ibid.*, p. 652)。こうしたスティグマは、1895年に「重大な背徳行為」のかどでロンドン裁判所から有罪判決を受けたワイルドを想起させるものにはかならない。『背徳者』の主人公は、友人であるメナルクを襲った「ばかげた、恥ずべき、スキャンダラスな訴訟」について語り、これがために彼は新聞メディアから貶められ、世間から「復讐」を受け、「よき社会」から「軽蔑」をもって疎まれるようになったとする (p. 647)。メナルクとワイルドの関係については、ピエール・マッソンによるプレイヤード版の「注釈」を参照のこと (p. 1374)。
- (9) Cf. *Dictionnaire Gide*, éd. sous la direction de Pierre Masson et Jean-Michel Wittmann, Classiques Garnier, 2011, p. 281. ワイルドの忠告については、ジッド自身の証言を参照のこと。「Oscar Wilde » [1902], in *Essais Critiques*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 852 ; « Propositions » [1911], *ibid.*, pp. 266-267.
- (10) *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et Voyages*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 166. 同性愛行為をカムアウトした自伝『一粒の麦もし死なずば』(1926年)では、少年期のジッドが「僕は他の人たちとは違う！」と叫ぶシーンが苦悩と優越感とともに描かれている。ジッドにとってこうした隔絶感、芸術的才能への自覚だけでなく、性的アイデンティティの確立においても、決定的なものであったろう。この主題については、次を参照のこと。Didier Éribon, *Réflexions sur la question gay*, nouvelle édition, Flammarion, coll. « Champs essais », 2012, pp. 46-54.
- (11) ジッドはモーリス・バレスが説く土着的ナショナリズムに反発しながら、「デラシネ」の寄るべき立場を模索していた。デラシネとはバレスが1897年に発表した小説『根こぎにされた人々 *Les Déracinés*』に由来する言葉だが、「パリで、ユゼスの父親とノルマンディーの母のもとに生まれた」ジッドは、この小説のなかで奨励される「アンラシスマン *enracinement*」(土地に根づくこと)に自らの「存在理由」を侵される危険を感じ、次のような感想を綴っている。「[この小説に登場する] 奴らに私は消されてしまう。彼らに敵対することでしか私は存在理由を持ってない […] 倦怠と悲しみ。国家に仕えたい。自分の能力を感じながらも国家にどのような奉仕を返すことができるかがわからない。国家はあなたを必要としていないようだ。必要としなければならぬはずだろう。しかしその必要性を国家にどう感じさせたらよいか」 (*Journal I 1897-1925*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 268 [以後、本書を *J1* と略記する])。メナルクの家宅批判と養子縁組への志向は、自らの土地を離れ放浪するデラシネたちの連帯をほのめかすものと捉えてよいだろう。ジッドはこうした〈デラシネのアソシエーション〉と国家との関係を『背徳者』において主題化するわけだが、この点については拙稿を参照のこと。「La question de l'“association” dans *L'Immoraliste* de Gide » [仏語論文] (日本語題:「ジッドの『背徳者』における「アソシアシオン」の問題」)、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第106号、2015年、71-88頁。
- (12) Cf. Claude Martin, *La Maturité d'André Gide. De Paludes à L'Immoraliste (1895-1902)*, Klincksieck, « Bibliothèque du XX^e siècle », 1977, pp. 218-220 ; Frank Lestringant, *André Gide l'inquisiteur*, vol. 1, Flammarion, 2011, pp. 332-335, pp. 376-379, pp. 691-693.
- (13) Jeannine Hayat, « Le mariage d'amour : une invention très actuelle », *Le Huffington Post Québec* [en ligne], le 17 juillet 2013 : <https://www.huffingtonpost.fr/jeannine-hayat/le-mariage-damour-une-invention-actuelle_

b_3605187.html> [consulté le 10 septembre 2018].

- (14) Cf. Billard, *André Gide & Marc Allégret*, p. 130-145 ; Lestringant, *André Gide l'inquisiteur*, vol. 2, Flammarion, 2011, pp. 57-66. エリザベートは『贋金づくり』の登場人物サラ・ヴェデルのモデルと言われており (Alain Goulet, *Fiction et vie sociale dans l'œuvre d'André Gide*, Minard, 1986, p. 262)、作中では彼女がイギリスの寄宿生と同衾していることがほめかされている。「そこは家のなかでも一番いい部屋だったから、寄宿生の女の子を寝かせることにしたんです。でも下宿代が支払いが足りなくて、いまはサラとベッドを共有しているんですよ。形だけベッドを二つ当てがったけど、まあ、無駄だったでしょうね……」 (*Les Faux-monnayeurs*, in *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. 2, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 250 [本書をRR2と略記する])。また伝記的な事実からいっても、エリザベートはイギリス人の女友達エテル・ホワイトホーン (通称ホワイトティ) と昵懇の仲だった。ジッドは母親のマリアにこう言っている。「エリザベートとホワイトティが新しいかたちの生、つまり世間の常識の外にある生を見出せないとしたら、いったいどんな女たちがそれを見出すのでしょうか？」 (Maria Van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide*, vol. 1, 1918-1929, Gallimard, 1973, pp. 8-9)。
- (15) Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite dame*, vol. 1, p. 43.
- (16) *Ibid.*, p. 45.
- (17) Cf. Lestringant, *André Gide l'inquisiteur*, vol. 2, p. 59. レストランガンは、ジッドがエリザベートとマルクに子供をつくらせようとしていた時期の会話に注目している。1919年4月21日にジッドが仲間うち (後に集団の養育をになうメンバー) で開いた「ミーティング」での会話であり、マリアがそのときの話題を記録している。「私たちは風俗のさまざまな変化、とくに戦争がもたらしうる変化、私生児、婚外子を産もうという来るべき意志、やがて女性が身を置くであろう新たな条件などについて話した。子供をもちたいというこの欲求は、まちがいがなく流行りだし、私たちのまわりに渦巻いているようだ。エリザベート [ヴァン・リセルベルグ]、マリー=アンヌ、シュノーキーまで […] ! 彼 [=ジッド] もまた、これに取りつかれている」 (Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite dame*, vol. 1, p. 16)。この翌日、ジッドは「エリザベートにマルクの子をもたせたいという熱望」を仲間の一人に打ち明けている (*ibid.*, p. 17)。
- (18) Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite dame*, vol. 1, p. 43.
- (19) *Ibid.*, p. 150
- (20) Cf. *Si le grain ne meurt*, op. cit., p. 271, p. 309.
- (21) *Les Faux-monnayeurs*, op. cit., p. 323.
- (22) *Morale chrétienne*, in *J1*, p. 261. 引用の直前のところで、ジッドが次のように書いていることも見逃してはならない。「覆いを取り去ってゆくと、それら [諸々のキリストの言葉] はますます劇的に見えてくるだろう。結局において家庭を否定し (人はその言葉を根拠に家庭をなくしてしまうだろう)、人間じたいをその環境から引き抜いて個人としての人生を歩ませ、地上にはもはや所有するものはなく、頭を休めるための場所すらないことを自らの例と声によって人間に教えているのだから。ああ、こうした『放浪状態』の出現、私は心の底からおまえを望んでいるのだ! そうした状態において人間は、閉鎖的な家をもたないので、自分の義務も愛情も、自分の幸福でさえも、特定の誰某だけを対象にすることがなくなるだろう」 (p. 260)。『地の糧』のメナルクにこうしたキリスト的モラルが託されていることは明白だろう。
- (23) *Idem*.
- (24) Note de lecture citée dans Alain Goulet, *Les Faux-monnayeurs, mode d'emploi*, Sedes, 1991, pp. 192-193. この内容が書かれているメモは、ジャック・ドゥーゼ文庫所蔵の、『コリドン』執筆メモを集めたファイルに入っている。
- (25) « En marge des *Faux-monnayeurs* », in *RR2*, p. 483.
- (26) *Journal II 1926-1950*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, p. 71-72 (24 février 1928).
- (27) *Ibid.*, p. 50 (16 octobre 1927).

- (28) *Idem.*
- (29) *La Symphonie pastorale*, in *RR2*, p. 46.
- (30) Cf. Pierre Masson, « Notice » de *La Symphonie pastorale*, *ibid.*, pp. 1147-1148. ちなみに『田園交響楽』には、父が息子に対して間接的にホモエロティックな眼差しを向けるところがある。「私は彼を眺めながらこう思っていた。もしジェルトリュードに目が見えたなら、このすらりと背の高い姿、こんなにびんとしているのにあまりにしなやかな体つき、皺ひとつない美しい額、率直な眼差し、まだ子供っぽいけれど急にものものしく陰影を帯びてきたような顔に見とれずにはおれないだろう、と。彼は帽子を被っておらず、グレーがかった髪は、そのころかなり長く伸びていて、ほとんど耳元を隠すほどだった」(p. 28)。
- (31) Lettre du 14 janvier 1923 citée dans Lestringant, *André Gide l'inquisiteur*, vol. 2, p. 174.
- (32) ジッドとマルクの父(牧師で宣教師でもあったエリー・アレグレ)との関係については、次を参照のこと。Lestringant, *André Gide l'inquisiteur*, vol. 2, p. 60, pp. 239-243.
- (33) *Les Faux-monnayeurs*, *op. cit.*, p. 409-410.
- (34) 二十世紀におけるホモセクシュアルの文学者たちの立場の相違については、次の著作を参照のこと。Patrick Dubuis, *Émergence de l'homosexualité dans la littérature française d'André Gide à Jean Genet*, L'Harmattan, 2011.
- (35) 先に挙げた『背徳者』についての拙稿と次を参照のこと。「ある共同体における連帯——ジッドの作中作「ティティルの物語」をめぐって」、『早稲田大学文学研究科紀要』、第59輯、第2分冊、2013年、99-111頁。
- (36) Éribon, *Réflexions sur la question gay*, *op. cit.*, pp. 196-197. ジッドのホモセクシュアリティについても多くのページを割いているこの著作のなかで、ディディエ・エリボンが「同性愛者は、自分たちの特殊な社会空間のなかで、つねに象徴的な劣位の状況にいる」という命題を受け入れつつ、次のように結論づける。「社会秩序のなかでのポジションがどのようなものであれ、あらゆるものによって分断されている個々人が、互いに深い繋がりを感じることができるのはなぜか。[...]なぜなら、彼らは性的秩序のなかで同質のポジションを占めているからであり、同じように性的秩序は、彼らが帰属する社会的かつ職業上の世界、各々によってあまりに異なるこれらの世界を支配しているのだ。おそらく、次のようなことが言える。いわば『性の領域での』連帯は、非合法性の印象が薄れるにつれて、ゲイやレズビアンへの可視化が増大するにつれて、階級、人種、政治的党派などの分化がますます激しく露わになるにつれて、後退してゆく傾向にあるのだろう」。エリボンは「被支配者や被抑圧者の連帯」の可能性だけでなく、その将来的な不可能性まで見通しているわけだが、彼の議論を踏まえながら補うかたちで以下の三点を指摘しておきたい。すなわち、家庭という社会空間において同性愛者がいぜん劣位の立場にあること、彼らが独自の家庭をもつ状況がほとんど非合法にとどまっていること、そういった立場の是正への要求と件の状況じたい——ホモペアレント性——のうちに「性の領域での連帯」の新たな形が表れているであろうこと。